

## 熊野神社例大祭について

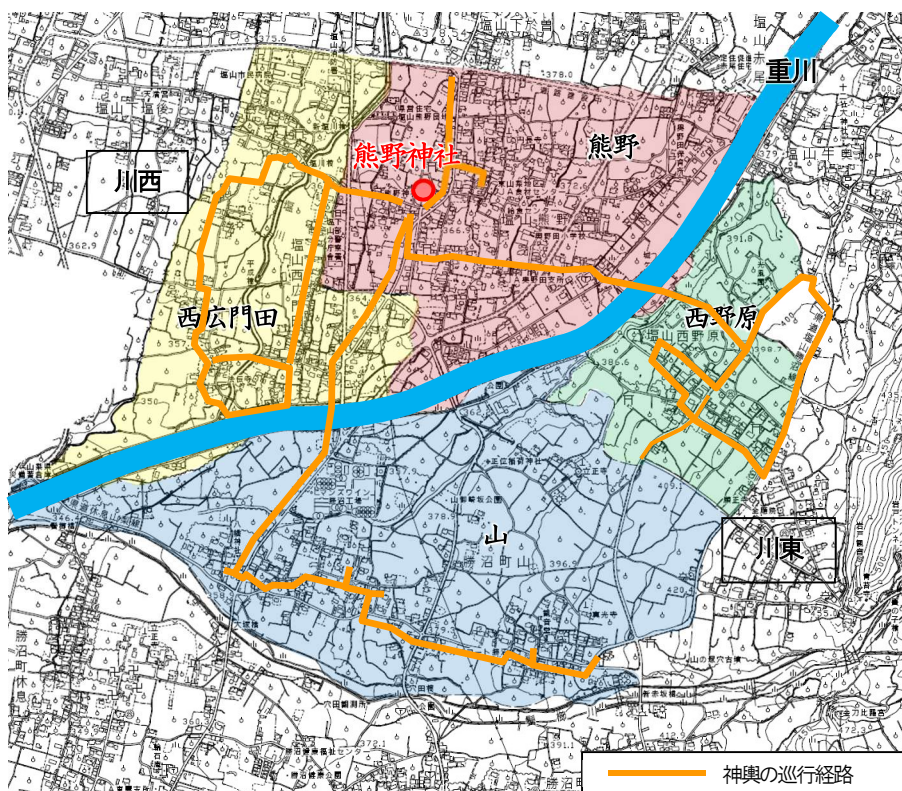
### (1) はじめに

熊野神社は、大同2年(807)に紀州熊野神社から勧請された。一説では、もとは塩山下於曾の影井地区にあり、水害のために現在地に移ったという。

熊野神社は、重川を挟んで右岸(西側)の塩山熊野、塩山西広門田、左岸(東側)の塩山西野原、勝沼町山の4地区の氏神であり、例大祭では、重川の水防祈願と子孫繁栄を祈願する御幸行列が仕立てられ、各地区を渡御する。山梨県内に伝わる御幸はいくつかあるが、なかでも熊野神社の御幸行列は、江戸中期頃の甲斐国の御幸の姿をよく残しており、貴重である。

氏子の4地区は、重川や鬢櫛川の氾濫による扇状地であるため肥沃な土地である一方、水害に悩まされる地域でもあった。そのなかにあつて高台に位置する勝沼町山は水害が少なく、江戸後期から明治までに形作られた町並みが現在も残る。また、川を挟んで東側の地域を「川東」、西側の地域を「川西」と呼ぶなど、重川には空間認識の中心としての位置付けがあり、一帯に暮らす人々の生活や文化に大きな影響を与えていた。

各地区を巡った行列が熊野神社に集結し、4地区の行列が出揃う様子は圧巻で、地域の人々が守り伝えてきた行事や歴史が現在も伝承されている。



■熊野神社氏子の4地区

## (2) 熊野神社例大祭の始まり

### ①熊野神社例大祭の歴史

熊野神社例大祭の発起は明らかでないが、勝沼町山の辻家に伝わる『辻家記録』の宝暦11年(1761)の条に「熊野祭礼八月七日御幸有所御停止二付延引如此但上組年番祭礼も御幸斗二而何も鳴物なし拍子等一切不致はたばかり二而御供致候」とあり、また、奥野田村文書に寛政6年(1794)の「御祭礼御供役割帳」、文政5年(1822)の「當御祭禮御供役害帳」、文政6年(1823)の「御祭礼役割帳」の記録が残されている。これらの史料より、少なくとも宝暦11年以前より神社の例大祭に際し、付祭りとして鳴物を従える御幸があったことがわかる。

熊野神社例大祭は、かつては7月7日、9月9日の両度行われ、明治以降10月15日となったが、現在は15日に近い日曜日に行われている。例大祭では、神事に合わせて氏子による付

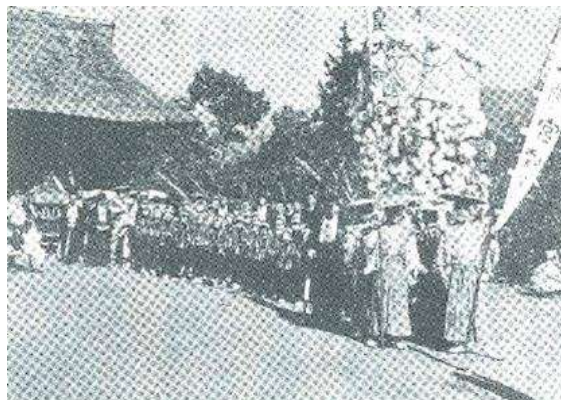
祭りが行われる。付祭りは、地区ごとに行列を仕立て、本宮から下宮までの御幸に従う。これには人手や費用もかかるため、昭和50年頃から4年に1度くらいの割合で行われてきた。近年では、平成3年(1991)から2年に1回の実施となっており、神事は毎年行われるが付祭りは隔年で行われている。氏子総代による神事みの祭は「イマツリ」と呼ばれる。

付祭りでは、各地区の行列が熊野神社へ渡御し、ここから下宮へ渡御する。伝承では、熊野神社を出た行列は一旦進路を東へ取り重川へ行き、その後西へ進路を変え清白寺(山梨市)の門前を通って窪八幡神社まで渡御したという。近世の村切以前にはこのような形での祭礼がなされていたことも考えられる。

### ②熊野神社例大祭の役割

#### 水防祈願としての例大祭

水防祈願として重川の災厄を鎮め、ひいては五穀豊穡を祈るものである。近世を通して水害の記録はないが、江戸幕府により編纂された『治河要録』には、「大川と申し候は、釜無川・ふえふきがわ笛吹川・



■昭和30年代の例大祭の行列



■昭和30年代の行列の金棒引き

荒川・塩川・御勅使川・日川・重川・鶴飼川」とあり、また、三大川除け場と呼ばれた治水の難所のひとつに笛吹川と重川及び日川の合流点があったため、水害に対する策を講ずる必要があった。

明治 40 年 (1907) の水害では、西広門田地区の集落の半分が流されるなど大きな被害が出た。近代化に伴い山林の木を伐採し、石材を採るために山を荒らした結果であるが、江戸時代を通じて水害がなかったのは、水防意識の啓発として祭典が機能していたということも考えられる。

### 安産祈願 (子孫繁栄) としての例大祭

安産祈願は、地域の要請に従い付加されていたものであると考えられる。熊野神社の行列にやっこぎょうれつ従う奴行列のこやっこ小奴にはたくさんの「ホウコウジ」が付けられる。ホウコウジは、「縁起猿」といわれる猿人形で、漢字では「這子児」を充てる。「はいはいをする子」の意で、安産の神様であるといわれている。見物人は小奴からホウコウジをむしり取ろうとし、小奴の方も取られまいと見物人ともみ合う。見物人が取ったホウコウジは、1年間神棚へあげた後、ドンド焼きなどでお焚き上げする。



■ホウコウジ

### (3) 熊野神社例大祭の流れ

熊野神社例大祭の付祭りでは、本宮、新宮、那智宮の三宮の神輿が、下宮明賀社に渡御する御幸祭りとして行われる。御幸する際、西野原、西広門田、山、熊野の4地区でそれぞれ行列を仕立てるが、その中心となるのは「打ちばやし」で、神社、明賀社だけでなく、渡御中の随所で奉奏される。熊野を除く3地区が3基の神輿の警護にあたり、宮本である熊野は神旗を守ると同時に、ヤッコラコラと呼ばれる奴行列を仕立てる。

#### ①打合せ

祭りの打合せは、地区ごとに9月半ばころ行われる。打合せでは、行列の参加人員、配役、衣装の確認と山車の花などの製作日程、打ちばやしの練習日などの確認が行われる。

#### ②準備

例大祭当日までに各地区でハタタテが行われる。熊野地区以外の3地区は、各地区の集会場にハタを立てる。山車に飾られる花は、山車1基につき約4,000個必要で、地区で分担して作られる。また、熊野地区の行列に出る小奴の体に付けられる「ホウコウジ」は、1人あたり250個ほど、合



計3,000個ほど必要となる。かつては小奴役の知り合いの女性に作ってもらい、自らが集めていたというが、現在では熊野地区全体で分担して作り、小奴役へ分けている。



■山車や太鼓山車に飾られる花の製作



■ホウコウジの製作工程

### ③打ちばやしの練習

打ちばやしは、熊野・西野原・山の3地区に伝承されている。平成7年(1995)には「打ちばやし保存会」が発足され、その継承に力が注がれている。

打ちばやしの配役は、太鼓は小学校の高学年、鼓は低学年の子ども、本笛は青年、助笛は壮年があたることとなっており、かつては家を継ぐ跡取り(長男)に限られていた。だが最近では子ども数の減少に伴い、跡取りにこだわらずに伝承活動を行っている。

打ちばやしの基本は、笛に合わせて形式的なバチさばきを演じる太鼓芸である。太鼓は、実際の音は出さず、打ち手は立ち姿で、上半身のみの動きでバチさばきを見せる。

練習は、地区ごとに9月下旬ころより開始される。バチの運法(動作)は、初めは子どもの後ろから手をとって教え、形が分かるようになると、対面してバチ運法の名称で動きをリードして教える。練習の終盤で歩みながら調子を合わせ例大祭当日に備える。

この打ちばやしは、伝習が困難な「歩きばやし」であるが、子どもたちは短期間で覚えてしまうという。このように、打ちばやしはそれぞれの地区で大人から子供へ伝承され、芸能を保持している。

### ④当日の流れ

午前8時30分より神社で宮司による祝詞の奉納が行われ、氏子総代など関係者の列席のもと、3基の神輿へ御霊が移される。神事が終了すると、山、西広門田、西野原は神輿を神社から各地区へ持ち帰る。

神輿が各地区の集会場に到着すると神輿の出発式を行ない、行列と共に地区内を渡御する。

午後1時ころ各地区の行列が熊野神社に集まる。山、西野原、西広門田、熊野の順で宮入りする。境内では、拝殿に神輿3基と子供神輿4基が安置され、拝殿下の階段と鳥居の間に万灯と神旗を立てる。各地区の行列や太鼓山車は、境内の空き地に控える。

午後2時ころ、下宮へ向けて神社を出発する。鳥居を出た行列は、まず神社の外周部を時計回りに巡行し、鳥居前に戻るとそのまま約150m南下する。その東側に下宮がありここまで渡御する。境内から鳥居へ出ようとする奴行列は、小奴の衣装に縫い付けてある小さなホウコウジを取ろうとする見物人でごった返し、なかなか前へ進めない状態になる。このなかで小奴は自身の背負う乳児程度の大きさのホウコウジは取られまいと死守し、これを取ろうとする見物人ともみ合いの喧嘩になることもある。

行列が下宮に着くのが4時ころで、最後に万歳をして祭典が終わる。神輿は神社に戻され神輿庫に格納される。

## 行列

御幸行列の順は、3地区に警護された神社神輿3基と、武田菱のついた祭礼旗の順で、山・西広門田・西野原・熊野地区がそれぞれにつく。山、西広門田、西野原の場合、神輿の前方には、先頭から1警護、2万灯（山車）、3神旗、4打ちばやし、5鉄砲、6金棒引き、7警護で、この後に8神輿が続き、その後ろに9警護が付く。1、7、9の警護は、西野原では「六尺」、西広門田では1を「黒棒」、7を「中警護・青竹」、9を「後警護、青竹」などともいう。神旗は対になっていて、2人ずつで10人が当たる。金棒引きは、女の子が行う。神輿の担ぎ手は、最低16人必要で途中での交代要員もつく。山が担ぐ神輿が最も重いといわれている。

熊野地区が担当する祭礼旗の行列は、先頭から1榊、2宮司、3祭礼旗（先旗）、4警護、5警護、6万灯（山車）、7前旗、8組中旗、9弓、10なぎなた、11後旗（武田菱の旗）、12世話役、13打ちばやし、14世話役、15金棒引き、16大太鼓（太鼓山車）、17子供神輿、18警護、



■祝詞の奉納



■行列のなかの打ちばやし



■見物人がホウコウジ・をむしり取る



■西広門田地区内行列巡行



19 奴行列となっている。奴行列は、先頭に大奴 1 人を置き、11 人の奴が後に続く。大奴が日の丸の扇子を振り、「コイコイ」とかけ声すると、小奴がそれに応えて「ヤッコラコラコラ」と練り歩く踊りを繰り返す。そのおり、小奴の付けているホウコウジを見物人がむしり取り合う。

40 年ほど前に勝沼町山出身の実業家から寄贈された太鼓山車と子供神輿が 4 地区ともあり、金棒引きと中の警護の間に加わる。行列にはそれぞれ 150 人ほどの参加があり、神社から下宮への御幸行列では総勢 600 人もの大行列となる。

### 打ちばやし

打ちばやしは、太鼓（太鼓持ち 2 人、打ち手 2 人）、鼓（2 人）、本笛（数人）、助笛（数人）の順で並び、渡御の行列に従い華やかさを演出している。前述のとおり、小学校の高学年が演じる太鼓と低学年の子供が演じる鼓は、打楽器的な役割をするものではなく、本笛や助笛の伴奏に合わせ、バチの握り方や腕の動きとで様式的な打ち方の型を見せるものである。その身振りから「舞う」と言われることもある。



■行列の先頭



■大太鼓（太鼓山車）、子供神輿



■万灯（山車）、前旗～



■太鼓



■奴行列



■熊野地区内を練り歩く奴行列